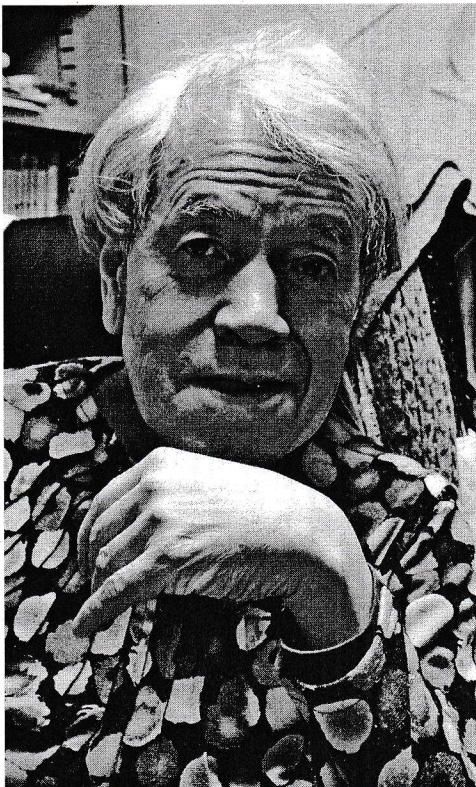


食の履歴書

作家 志茂田 景樹さん

身近だった農・漁の営み 自然との共生伝えたい



僕 は昭和15(1940)年の生まれです。父が国鉄職員でしたから東京・小金井の国鉄官舎に住んでいたんですよ。戦争中から戦後にかけて覚え

ていたのは、家の庭でカボチャを育てていたこと、官舎から子どもで10分くらいのところにある畑を農家から借りて、サツマイモを作っていたこと

ですね。種芋は自宅に置いておき、植える時期になると父や母が畑に埋めていました。僕も興味を覚えて親のまねをした記憶があります。まあ手伝ったというよりは、いたずらしていたというんでしょう。小金井は栗の産地でもありました。栗農家は一応生け垣で囲っていましたが、枝が伸びて

くるでしょう。本当はいけないんだけど、皆、道にまでひょっこりと顔をのぞかせる栗を取っていました。それを母にゆでてもらったのが楽しみで、昆虫の幼虫も入っていて、それごと食べていました。後で振り返ると、大変良質のたんばく質を取っていたという感じがします。

産 地で取れたものはおいしいというの、魚にもいえることです。母の実家のある静岡県宇佐美村(現伊東市)に、お盆の時期とかに行きました。当時は、地引き網でムロアジを取っていました。網を上げる時には半鐘が鳴らされ、漁師以外の人もはけつを持って駆け付けて手伝うんです。手伝ったなら、ばけつに魚をもらえます。小学校に入ったころには自分一人で駆け付け、重いばけつを持って帰った記憶があります。その魚を、伯母と母が開いて一夜干しにする。ものすごくおいしいんですよ、香ばしくて、身が柔らかくて。東京でアジの干物が出ると、何でもなますいものを食べるんだと不満に思うくらい、味の違いがありました。

農 僕は子どもたちに本を読み聞かせる活動をしています。訪ねるのは、田んぼや畑が広がる地域が多いですね。ある時、会場の公民館に着いたところ、職員が軒下に作られたツバメの巣を落としていました。ふん書を選んだためでしょう。それを見た子どもたちが「ツバメって悪い鳥なの？」と。農家に生まれ育ったけど、あまりよく知らないんですね。そこで読み聞かせの時に、話してあげました。家にとってツバメは益鳥であり、生活に深く関わっているんだよ。巣を作っているから、夕方薄暗くなっても飛び回っているだろう。あれは飛びながら虫を捕まえて、巣に運んでひなにあげるためだよ、と。自然と共生しながら米や野菜が作られているということを、子どもたちに伝えていきたいと思っています。

(聞き手・菊地武顕)